

天声人語

本の題名は『小さな抵抗』だが、その時にはとてもなく大きな抵抗だったに違いない。著者の渡部良三さんは学徒兵として出陣し、中国の部隊に送られた。みなで朝食をとつていた最中、上官から言われた。今日は捕虜を殺させてやる、と▼度胸をつけるため中国兵を突き刺せという国際法無視の命令である。「おどおどして分隊長に恥をかかせたりしない様にな」と言われ、みなが従う。しかしキリスト者の渡部さんは拒み、私刑の痛みに耐える日々が始まった。渡部さんは当時のことを多くの短歌に詠んだ。へ「捕虜殺すは天皇の命令」の大音声眼^{まなこ}するどき教官は立つへ「捕虜ひとり殺せぬ奴に何ができる」むなぐら擴むのしり激し^ひへ「酷き殺し拒みて五日露營の夜初のリンチに呻くもならず」切と思われるか。しかし日大アメフト部の問題を見るにつけ、重なる部分を感じてしまう。独裁的な監督のもと、異常な指示がなされ、強いられる構図があつた▼救いは、タックルをした選手が自ら口を開いたことか。「プレーに及ぶ前に自分で正常な判断をするべきだった」と悔いる姿は、重い呪縛から解放されたように見えた。選手たちは「監督やコーチに盲目的に従つてきた」と自らを省みる声明を出した▼監督とコーチ1人は事実上の永久追放になる。戦犯を罰し、胸をなでおろす。それだけの結末にしてはいけないと思う。私たちの抱える闇が、ふつと表れただけかもしれないから。

2018・5・31